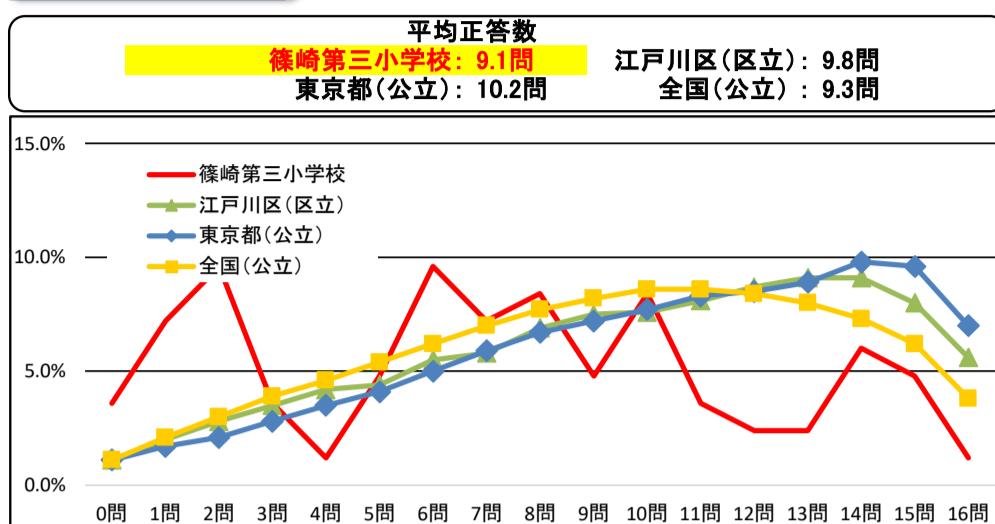


令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【算数】篠崎第三小学校

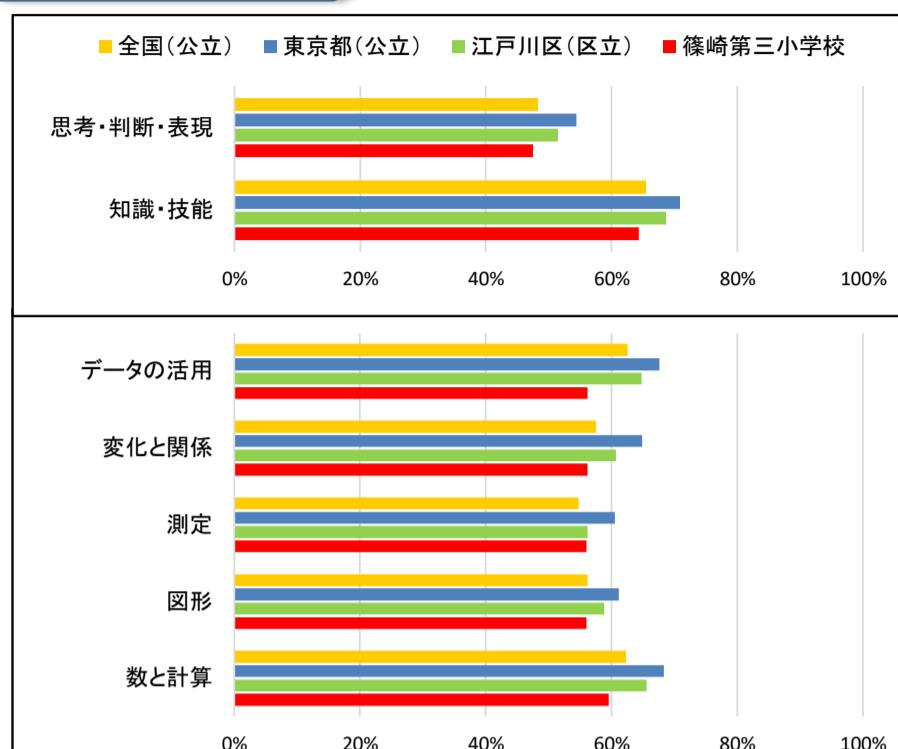
正答数分布



【平均正答率の差】

篠崎第三小学校	57%
江戸川区(区立)	61%
東京都(公立)	64%
全国(公立)	58%
都との差(ポイント)	-7.0

「領域別」の結果

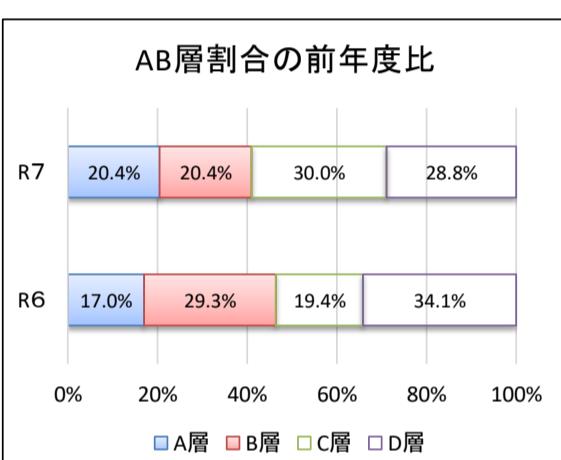
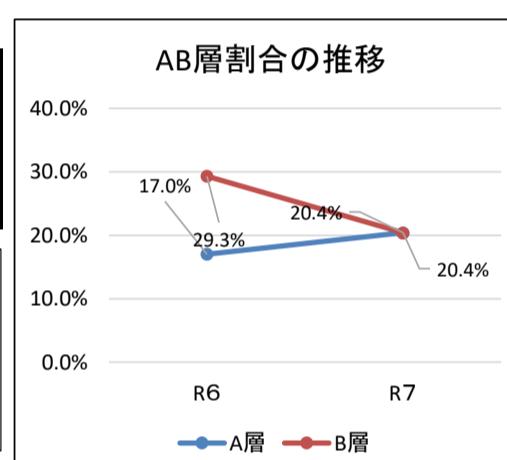


四分位における割合(都全体の四分位による)

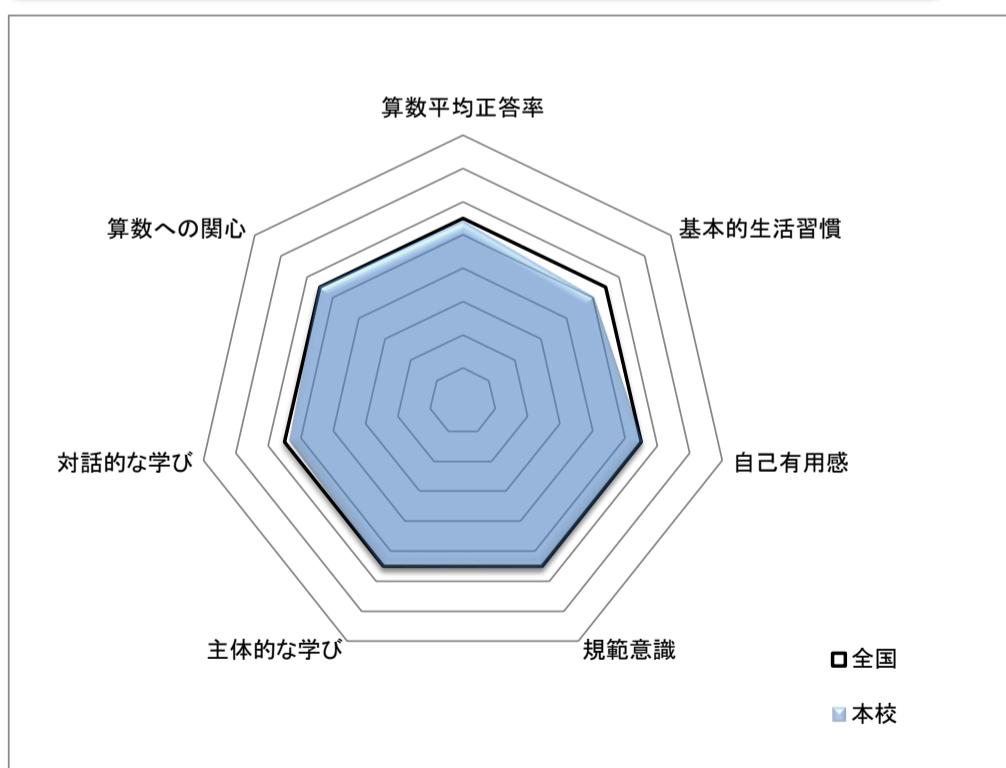
上位 ← → 下位

算数	A層	B層	C層	D層
	14~16問	11~13問	7~10問	0~6問
篠崎第三小学校	20.4%	20.4%	30.0%	28.8%
江戸川区(区立)	22.7%	25.9%	27.9%	23.5%
東京都(公立)	26.4%	25.7%	27.6%	20.3%
全国(公立)	17.3%	25.0%	31.4%	26.3%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

- 平均正答率、算数への関心、対話的な学び、基本的生活習慣が全国平均より低い。
- 平均正答率は、全校平均まであと1ポイントまで上昇した。引き続き日々の基礎的な取組を継続し、基礎学力を培っていく。
- 基本的生活習慣の確立は、家庭の協力を得られるよう引き続き働きかけをしていく。

《家庭・地域への働きかけ》

学期に1回実施の生活リズムカードや江戸川区Study Week(家庭学習週間)で、家庭に協力を依頼しているが、睡眠時間が十分とは言えない家庭が散見される。学習に集中して取り組めないことにつながるため、家庭への啓発に努めていく。
また、家庭学習週間の取組状況を分析し、家庭に示していくことで家庭学習への意識を高めていく。

《現状把握》

- AB層の割合と取組内容について
・A層+3.4%、B層-8.9%とA層は上がったが、B層の割合は下がった。

・取組内容は、
 ①東京ベーシックドリル実施語の分析と授業改善
 ②苦手分野の朝学習での反復練習
 ③EDOスク(放課後学習教室)との連携を行っている。
 この3つを通して、児童の実態を把握した授業を行う一方で、授業以外の時間での反復練習を習慣化することで基礎学力を培っていく。

《学校の取組》

・教員の指導力向上
 ・江戸川区算数スタンダードの研修を受けた授業改善を行っていく。
 ・東京ベーシックドリル診断テストを学期に2回行い、その結果の分析から課題のある分野の授業改善を行っていく。

・基礎学力の保障

・東京ベーシックドリル診断テストや江戸川区学力定着度調査の実施後の分析から、児童の苦手分野を把握し、毎週火曜日の朝学習等で反復の練習を行っていく。
 ・EDOスク(放課後学習教室)と連携し、算数に苦手意識のある児童の基礎学力を養っていく。

・学習習慣の確立

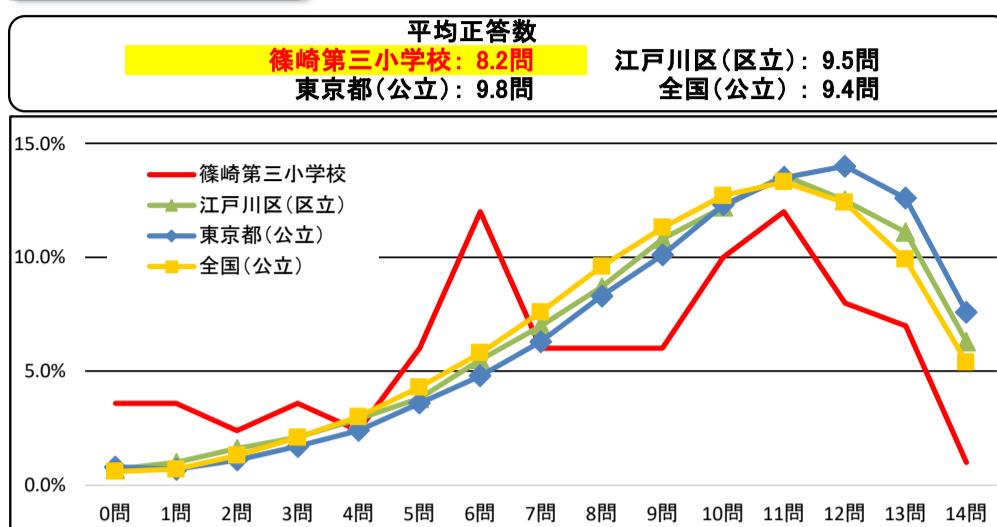
・江戸川区Study Weekと関連した取組として、「家庭学習週間」を各学期に2週間ずつ実施する。また、家庭学習の例示を行う。児童の学習時間を「学年×10分以上」をめあてとしているが、6年生で60分以上学習している児童が44.6%と、都や全国に比べ明らかに少ないことが分かる。家庭学習週間終了後に分析資料を配布するなどして実態を伝え、改善に向けた啓発活動を実施していく。

・AB層の育成

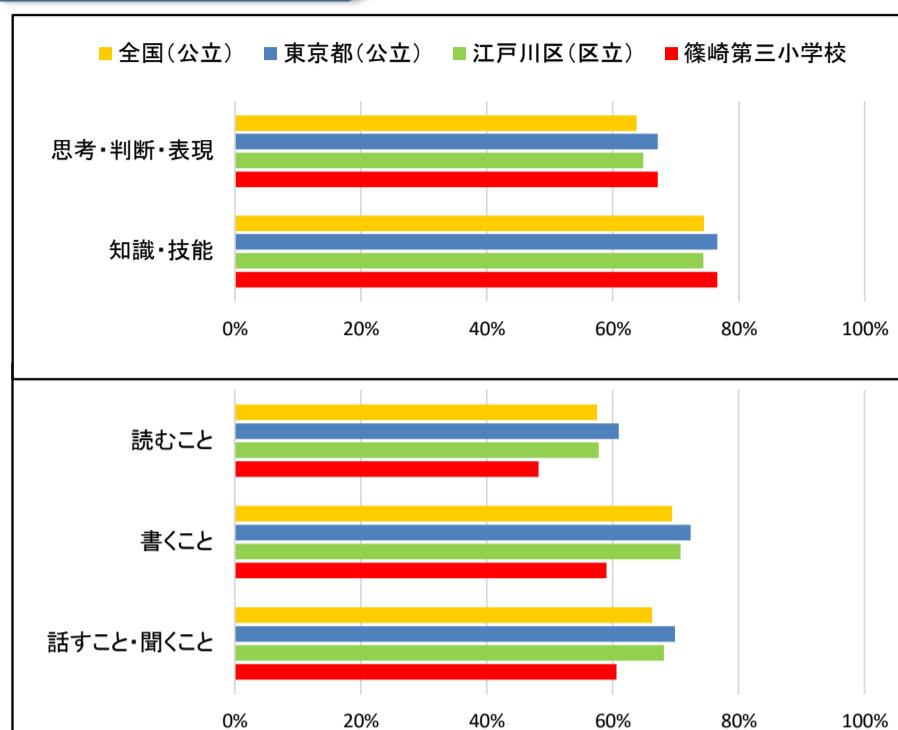
・習熟度別に5つのコースに分かれた算数の授業を展開している。単元ごとにレディネステストと児童の実態を考慮したコースわけを行い、より効果的に学べるようにしている。

令和7年度全国学力・学習状況調査 結果分析表【国語】篠崎第三小学校

正答数分布



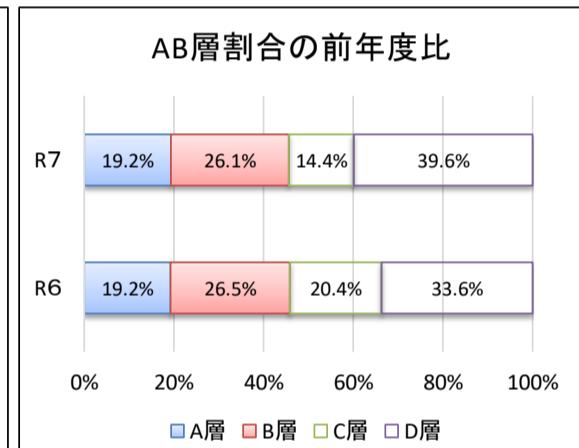
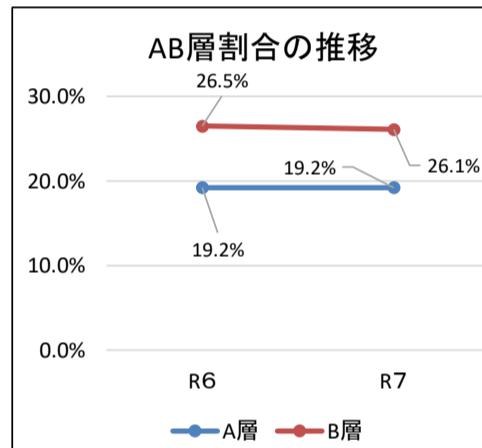
「領域別」の結果



四分位における割合(都全体の四分位による)

国語	A層	B層	C層	D層
	12~14問	10~11問	8~9問	0~7問
篠崎第三小学校	19.2%	26.1%	14.4%	39.6%
江戸川区(区立)	30.0%	25.8%	19.5%	24.7%
東京都(公立)	34.4%	25.8%	18.4%	21.4%
全国(公立)	27.7%	26.0%	20.9%	25.4%

四分位とは、データを値の大きさの順に並べたとき、児童数の1/4、2/4、3/4にあたるデータが含まれているのはどの集合かを示すものである。下の表では、四分位によって児童をA、B、C、D層に分けた時のそれぞれの層の児童の割合を示している。なお、本データで示している四分位は、東京都(公立)のデータを基に定めている。



各領域における、全国平均正答率及び、全国の肯定的回答合計値を基準とした場合の、本校の様子。



《チャートの特徴》

- 平均正答率、国語への関心、対話的な学び、基本的生活習慣が全国平均より低い。
- 「対話的な学び」は本年度の校内研究にも深く関わっているので、より対話的な授業になるよう研究を進めながら授業改善を図っていく。
- 基本的生活習慣の確立は、家庭の協力を得られるよう引き続き働きかけをしていく。

《家庭・地域への働きかけ》

学期に1回実施の生活リズムカードや江戸川区Study Week(家庭学習週間)で、家庭に協力を依頼しているが、睡眠時間が十分とは言えない家庭が散見される。学習に集中して取り組めないことにつながるため、家庭への啓発に努めていく。
また、家庭学習週間の取組状況を分析し、家庭に示していくことで家庭学習へ意識を高めていく。

《現状把握》

- AB層の割合と取組内容について
- 昨年度との比較では、A層は変わらず、B層は-0.4%となっている。

学校の取組内容は、

- 校内研究による授業改善
- 朝学習を活用した「語彙を増やす活動」
- 「YOMUよむワークシート」の活用を行っている。

この3つを通して、対話的な授業を行う中で思考力や表現力を養う。また、授業以外の時間でも基礎的な語彙を増やし、読解力を培う取組を継続していく。

《学校の取組》

- 教員の指導力向上

研究主題を「他者の考えを聞いて、学びを深めることができる学習活動の工夫」として授業改善の研究を行っている。他者の考えを聞く機会を設定し、学びを深めができる学習活動を児童の実態に合わせて工夫することによって、自分の考えをもてたり、自分の考えを広げたり、深めたりする児童を育成していく。

・基礎学力の保障

校内研究での授業改善を通して、自ら考え、学び合う児童の育成をする。「話すこと」「聞くこと」に重点をおき、「話し方名人」「聞き方名人」など、話すことに苦手な児童も取り組めるようにする。毎週火曜日の朝学習の時間を活用しYOMUよむワークシートに取り組むことで、読解力を積み重ねていく。また、校内研究に常時活動として「語彙を増やす取組」を各学年の発達段階に合わせて行っていく。

・学習習慣の確立

江戸川区Study Weekと関連した取組として、「家庭学習週間」を各学期に2週間ずつ実施する。また、家庭学習の例示を行う。児童の学習時間を「学年×10分以上」をめあてとしているが、6年生で60分以上学習している児童が44.6%と、都や全国に比べ明らかに少ないことが分かる。家庭学習週間終了後に分析資料を配布するなどして実態を伝え、改善に向けた啓発活動を実施していく。

・AB層の育成

ドリルパークを週末や朝学習の課題とし、各児童にあった目標(回数、時間)を立て、実施する。

校内研究を中心とした授業改善を行う中で、他者の考えを聞いて、自分の考えと比べ、違いや良さに気付き、意図を明確にして表現することができる児童を育成していく。